

いつでも

今が 旬

と言える

“力”を育てる術

人材教育コンサルタント 坂巻美和子

少子高齢化が進む日本では、女性の働く力に期待が高まっています。しかし結婚や出産、子育てや介護などで仕事を抑制したり、中断せざるを得ないことが多い女性にとっては、たった一つの道、たった一つのキャリアを追求することは難しいと言えるでしょう。そうした中でも、仕事を続け、自分を磨くことをあきらめずしてはけません。回り道をしながらでも、自分の生きる道を模索し続けるためのヒントをお教えします。

「働き続けられる能力を持ち続ける」時代から「車線変更をしても働き続ける」時代へ

早いもので、私の研修講師としての経歴も35年になります。その間、働く女性を対象とした講演や研修の場でも、言い続けてきた言葉があります。それは、「もしライフイベントのからみで働くことをやめても、働き続けられる能力だけは持ち続けていなければいけない」という言葉です。

出産、子育て、介護、やむを得ぬ失業など、どのような場に身を置くようになっても、仕事の場においても復帰できるような「知識」「技能」「心がまえ」を磨いておかなければいけない、ということをお願いしてきました。

しかし最近の社会環境・経済情勢の変化からは、さらに厳しい心がまえを持つ必要があると感じるようになってきました。

何が自分に合う仕事なのか、人生なのかと「模索の日々」がありました。この仕事がいいかな、何を選ぶべきかと「選択していた頃」もありました。やっとこれが私の仕事と「確立できたように感じていた風景」にも出会いました。

その私のさまざまな時期の経験をお話することで、みなさまがこれからの「キャリア形成」に立ち向かっていくための、何かのヒントを感じていただけたら幸いです。

◆前向きでなかった第1回目の退職
昭和40年代、私は20代でした。その頃、就職するということは、男



した。たとえ一時的な休止があろうとも「働き続けることをやめない」という心構えが必要になってきたようです。東京電力タイパシテイ推進室長の両宮弘子さんはおっしゃっています。「女性の場合、男性のように一生高速道路を猛スピードで走っていくことができないうちも、一旦一般道に降りて少しペースダウンしなくてはならないこともあるでしょう。ただ大切なことは、ゆっくりでも道を車から降りることもなく運転し続けること」

イラスト・恵賀均

性的場合は終身雇用が一般的で、就職した企業に一生を預けるとい時代でした。女性は、結婚するために退職する「寿退社」が王道とされてきました。そのような時代に、私はいくつもの企業の門をたたいていました。

学校を卒業してすぐに就職したD證券では、どうも証券事務の仕事が私に合わないと感じていました。いえ、仕事に合わないというより、同僚の先輩同士のいがみ合いに悩まされていたことも大きかった。二人はいつも私を通してコミュニケーションを成立させていたもので、とばかりがこちらに回ってくることもしばしば。そんな人間関係に涙した記憶もありません。

退職した直後のきつかけは、本店資全部から支店勤務を命じられたことでした。むしろそのタイミングを選んで辞表を出した、という記憶が正しいようです。勤続期間は2年弱。退職理由は、いまもって私自身にもよく分から

ないと言っているかと思えます。近頃では、将来のために「何らかの資格」にチャレンジしよう、飛躍のための退職をする人にも多く出会いますが、私のように、これといった理由がないけれど辞めてしまったという方も多いのではないのでしょうか。それも「模索の日々」の特徴的な表われ方かもしれません。

人生に向かって、ほとんどの人は、最初から立派な意志を確立し目標を明確に定めて生きていくわけではありません。キャリアデザインという意識を初めから持つスタートラインに立つ人はむしろ少ないようです。

私の第1回目の退職も、決して前向きなものではありませんでした。◆適性に合わなくて第2回目の退職
私の人生2度目の就職。そこはM重工業の「社長室経営管理システム開発室」でした。得意な学科という欄に「数

学」と書いたのが災いし、私は自分の適性と似ても似つかないコンピュータの部屋に配属されてしまいました。いったん配属されれば、もう「自己申告制度」などまったくない時代です。結婚、妊娠後も働き続けていた先輩が、段ボールに入った紙を倉庫に入れる作業が身体に無理になったのでと配置換えを頼んでも、見事にはねつけられて泣く泣く退職していったこともありました。

ここで私は、命じられた仕事を「こやかに」「正確に」シゴキと進めていました。新しい仕事の創造、新しい仕事の進め方などはゆめゆめ思っていませんでした。適性に合わないのだから、言われた仕事をこなしていくだけで精いっぱいでした。というわけで、勤続約6年で退職を選びました。

◆3度目の転職は「適職」。しかし会社の都合が…
それでも、この模索のなかで、貴重ないくつかのことを教えてもらったように思います。初めでの就職先だったD證券での仕事は、黒表紙の元帳の借方・貸方の次ページ繰越欄を埋める単純な仕事でした。来る日も来る日も最後の一行を埋め、一週間が終わった日に係長に呼ばれました。

「どうだね、会社のお金の動きが少しは見えたかね?」
「はあ、私は、次ページ繰越をしていただけですが……」
私は目の前に流れている貴重なデータを、情報としてとらえるアンテナを立てることも出来ないのです。



そして私は、3度目の転職を果たしました。財閥系のS不動産でした。それは、私にとって初体験の「営業」の仕事でした。実は会社にとっても「女性営業職」は初の試み。なにせ従来の不動産業界では、営業職に女性などとは考えられなかった時代でした。しかし私はここで、はじめて自分の適性を提供することになるのです。

営業
自分の
適職
S不動産
提供

サービスを提供する仕事は自分に向いていることや、営業としてお客様と

接する時、自分が輝いていることを知りました。それは、10年回り道をしたからこそ分かった自分の適職でした。ずいぶん遠回りしたようですが、他の仕事を経験したからこそ「営業」の仕事のおもしろさが、なおいっそう理解できたのだと思います。

しかししかし……

オイルショックによって、不動産業界に冬の時代が到来しました。せっかく不動産業界営業分野に広がった「女性の新たな職域拡大」でしたが、今のように男女雇用機会均等法など制定されていない時代です。企業にとつて女性のポジションはいちばん壊しやすいものでした。一時は15~16人いた女性営業マンも、最後は3人にまで減っていました。そしてその3人にも会社側から、女性営業職というポジションがなくなることを宣告されてしまいました。

おもしろくなって辞めて、適性が合